広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	イマジネーションの時間性・空間性 ： 子どものイマジネーションの意識構造を考える
Author(s)	中川, 節子
Citation	児童の言語生態研究 , 15 : 12 - 18
Issue Date	1997-01-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045172
Right	
Relation	

合同研究調査報告

特集 子どもにとっての時間と空間

イマジネーションの時間性・空間性

——子どものイマジネーションの意識構造を考える——

中川節子

イマジネーションの意識構造図作成にあたって

「我々のイメージが我々の現実生活を誘導していると考えなければならない。」この考え方を基本にして、イメージ運動の構造を考えてみた。イメージをイメージ運動としてとらえていくと、つまりは、それはその人自身の〝ま〟の問題であると考えられる。それらの〝ま〟は、本来統合されてとらえられるものであるが、ここでは、あえてわかりやすくするために、時間・空間とわけて意識構造図を作成した。

左に空間、右に時間とわけ、その中央の背骨にあたる部分に、時間・空間の変換、つまり、トランスフォーメーションを置いてみた。空間→時間→時空の転換（トランスフォーメーション）の順に、子どもたちの資料、又は、日常の事柄で考えられうるイマジネーションの問題を加え、解説をつけていくことにする。

空間

(1) 母胎回帰（空間の中の安定度）

Ⓐお袋の世界

明るいよりは暗い方が安定する。昼よりも夜、めあきより盲目の方が感覚が鋭くイメージが伸びる。

○小学生の子どもは廊下を歩くときいつも、前の人をさわりながら歩く、廊下の壁をさわりながら歩く。

○2～4才位のころ「おかあ」といって、母親のねまきを持って離さない。本物のおかあさんがそばにいても、それを離さず、その母親のにおいのついているねまきの中にもぐってねている。（2～4才男子）（「助六」の母が紙子を着せるのと同じではないか）

○ひざの中は扇形の子宮の形をしている。より安定感を感じる。

○子どもたちが専科の時間から帰ってくる「おかえりなさい。」というと、びっくりしながらも、「ただいま。」って言う。しばらく教室で出迎えなかったりすると、「先生、ぼく『ただいま』って言いたいよ。」（3年男）

Ⓑおうち

子どもたちが一番安堵を感じる空間ではないか。生命復活の新たな生命としてのエネルギーを浄化する場と考える。

（このことについては詳細を本誌宮田氏の論文参照されたいが、一例だけあげておきたいと思う。）

○担任している子どもが、夢中になって話しかけてくるとき、思わず、C1「おかあさん、ねぇおかあさん」を連発する。

C2「おまえ、今、おかあさんっていったぜ。」

C3「え、そんな事、いってないよ。」本人は気付いていない。

イマジネーションの意識構造

空間

（1） 母胎回帰
- Ⓐお袋の世界
- Ⓑおうち
- Ⓒ内臓感覚（イマジネーションの生理感）

（2） あの世とこの世
（境界領域としてのイマジネーション）

（3） 魂の浮遊性
（迷うということ）

（4） イマジネーションの領域
（現実とはちがう広がり）

時間・空間の転換
トランスフォーメーション

（1） 変身

（2） 存在
- Ⓐむかしむかしの世界
- Ⓑ歴史

（3） 人形
（呪術性をもってしてあの世とこの世を結びつける）
こわい　たたり
人間、血、心
＜意識と位置＞
1.祈祷性　2.没我性
3.邂逅性　4.予見性

（4） 見立て

（5） 白昼夢

（6） つぼ

時間

人間が本性としてもっている（イメージの発動性）

（1） イマジネーションの連続性
（次から次へ）

（2） イマジネーションの反復

（3） イマジネーションの蘇生
（イマジネーションの残像性）

を含んでいると考えて

（4） イマジネーションの流動性・流浪性
（偏向性）

適応性の問題（のらない）

（5） だまる
（イマジネーションの清浄性）

（6） 待つ

この報告を研究会の男の先生に話すと、「ぼくも、『おかあさん』って言われます。決して、おとうさんではありません。」これは、おうち空間の中に、母の存在があるからではないか。

Ⓒ内臓感覚（イマジネーションの生理感）
母胎の中の記憶を、内臓感覚と考えた。

○パパへ
　ぼくはママのおなかの中でいい音をきいた。それがおんがくだってことがわかったよ。でもあとのことはわかんなかった。ママのおなかの中はあつくてなんかきもちわるかった。で、やっと生まれてきたとき、スッキリしたよ。だから、オギャー！ってないた。
　またママのおなかの中で、ママのおなかをけとばしたこともあったよ。そのとき、ママが「いたい。」ってこえもきこえたよ。そしてパパがやっぱりおねがいしたからぼくはじょうぶに生まれました。Sより（2年男）

○民話「カッパの首」という題名を言ったとたん、
「カッパの生首だ。生首だ。」と生首を連発し、叫ぶ子がいた。本当に生首の話だった。でも、みんなやーな顔になった。（4年男）
（子どもは生首なんかみたことがないのに生首が何かおそろしいと思う。何か動かすものがある。経験がなくても感性が豊かに働けば、充分その感覚が持ち得る）

　子どもたちのお話作りの最後に登場するものは、だらけ・まみれが多い。うんこまみれ、血だらけ、血まみれ、そしてお話はメチャメチャになり終わることが多い。もう自分のイメージがぐるぐるめぐりメチャメチャになってしまう。夢中になり、支離滅裂になり終わる。そこに子どもがイメージの誘導で動くさまを見る思いがする。イメージの偏向性をも見る。

○うんち大好きの男の子。トイレにうんちをしにいくと10分～15分は出てこない。大きな声を出して自分のしたうんちをみて、楽しみ、遊んでいるのである（5才男）

○夜、おフトンの中でうんちをしちゃった女の子
「ともちゃん、うんちうんじゃったの」（3才女）
　まさにうんちは子どもの体感の原点といえるだろう。そして、その話は子どもの猥談だろう。（うんち・えっち・わるぐち）

○K「おまえは、くそ！」
K「おまえはウンチ！」
K「おまえはチンポコ！」
K「おまえは……。」
と次々指さしながら言っているうちに声が上ずってくる。私が、
〈Kちゃん〉
と目でたしなめると、
K「わぁーどっとさめちまったよ。
　つまんねぇの。またふだんだよ。」
（3年男）

たくなっちゃう。」
K「おれもいじめたくなる。かわいい子がいると……。なんか気持が、あーって、なっちゃう。」
T「なんかじめたくなる。かわいすぎて。かわいい子を見ていると、よだれが出ちゃう。なんか食べちゃいたいくらい。」
S「Tちゃんて、おっぱい食べたいって。」
K「何いってんだよ。エッチ。」
T「エッチなこというなよ。S。」
（中略）
K「Tちゃんて、おこるとなんでもかむんだよ。女をかむんだよ。」
S「わかった。好きだからだ。」
T「おれ、そんなこと言ってないだろう。」（3年男）
○I「よー、おまえ、ヘビふりまわしたことあるか。」
Y「ない。」
I「ヘビって泣くみたいな顔するぜ。オレそうすると、もっとやりたくなっちゃう。」（3年男）

(2)あの世とこの世

上原輝男氏の「かぶき十話」の中に、次のような記述がある。「『左沢』と書く地名がある。『アテラザワ』という。最上川と寒河江川に挟まれたような地形のところがアテラザワである。寒河江市全体が、地図を見るとこの二つの川が作った土地であることが誰にでもわかるが、迫、境、なる江沢地の意であろう。……（略）『あてら』というのは、『あちら』に相当しそうだ。『あちら』もしくは、『あっち』というのが、私は、今のところ、もっとも正しいように思っている。……生と死を配当するならば、左が死の方だということである。……当然左沢は浄土ということであったろう。」日本人の考え方の中には、この世の中にちゃんとあの世を現存させている考え方があったのではないか。と思われる。これは人間のイメージが、あの世とこの世をわけていない延長線上に置いているということなのでは、ないかと思う。
○昔「あたご」と言いながら、うまとびをした。この「あたご」もあちらの世界の意味なのだろう。うまをとぶことにより、こちらの世界から、あちらの世界にとんでいく、という遊びなのだろう。
○ままごとあそびをしていて、（6才と3才）
K「そこから『ただいま』って入ってきて、ふーちゃん」
でも反対から入ろうとする
K「あっちはだめなの。うちじゃぁないから。」
F「なんでうちじゃないんだよ。うちのにわじゃぁないか。」
K「だって、あそこはふだんの場所なの。」ままごとの世界は現世ではない空間と思っているのか。だから、ときどき死んだおじいちゃんなんかも登場してきていた。
○人が橋の上を渡っているような山水画のすみ絵がかけてある。それを見て子どもが、
「おじいちゃんは、あそこへ行ったんだね。」と言った。
すみ絵は色彩を消したものである。すると、そこには、この世ならぬ世界が出てくる。（6才男）
○飛行機に乗っていて雲海の中に入った。雲海は、果てしなく続き雲海の間から、光がさしていた。光と雲の世界である。
「あっ、天国だよ。おかあさん。天国。でも、おばあちゃん、どこにいるんだろう。」
おばあちゃんが死んで六ケ月目であった。（6才男）

(3)魂の浮遊性（まようということ）

上原氏の言葉によると、「まようということは、間によっていることである。まようと考えると、マイナス面ばかりをとってしまうが、まによっている楽しさもあるのではないか」と言われている。これはまが不安定である不安さと、浮いている状態を感じる両面があるのではないかということを言いたいのではないかと思う。
○「あの時からぼくは変わった」という題で書かれた作文
学校の帰りのバスの中で降りる停留所がもうすぐという時に寝てしまった。気が付いたら、立川だった。その時僕は、とても怖かった。暗い中をバスは走っていて、もっと怖くなった。怖くて、眠気も忘れてしまった。停留所で降りたら、お母さんが待っていたのでほっとした。僕はその時、少し僕にも、こういうことができるんだと、わかった。（5年男）
○一九九六年・二月・子どもたちだけで、山にまぎれこんでしまった事件があった。これも、子どもたちのイメージ遊びが、そうさせたのだと考える。もっともっと登ってみよう。と、もっともっとが、時空をこえてしまい、まよってしまったのではないか。そして、みんなで協力して一日すごした時は、単に怖いだけでなく緊張した中に於いても楽しかった一ときではなかったかと思う。
○迷路あそびで、T夫は迷路が大好き。「行こう、行こう」とせがむ。M子は「私は行きたくない。出られなかったら、いやだもん。」という。迷路あそびに、目をかがやかす子と、顔のくもる子の二種類がいることが、おもしろい。一方は間に酔うことを自ら、楽しもうとするが、一方は、もしも出られなかったら、と予見的なイメージが先行するからだろう。
（T夫6才・M子3年）

(4)イマジネーションの領域

（子どもにとって広い・狭いということ）
子どもは案外視野が狭いのではないか。広いところにつれていくとかえってすくんでしまうところがある。

○T先生が、子どもたちを広い校庭に連れていき、歩かせることをした。結果子どもたちは、まっすぐ歩くことができない平衡感覚を失ってしまうからだろう。

子どもたちが路地を見る感覚。私たちにも覚えがあるが幼い日遊んだ路地に大人になり行ってみると、意外にも狭かったと思うことがある。これは単に身長の変化だけでなく、意識そのものの違いなのではないか。子どもたちの意識を考えると、その一部分に於て、くり返していくことにより、どんどん微視的になっていったり、部分肥大や部分縮小になっていく、そういった偏向性があるのではないかと思う。子どもが、縁の下にもぐり込んだり、机の下に入り込むのが好きなのは、そのためではないか。

○家庭訪問に行った時、「次は僕の家だから。」と言って、はりきって案内役をかって出てくれた男の子。

「近道を教えてあげる」とまっすぐなはずの道をはずれ、くねくねと路地に入る。

「この近道、ぼく大好きなんだ。」と言いながら、ぐるりと大きくまわって到着。「あら、先生、こちらからわざわざまわり道していらしたんですか」と母親。「ね、先生、近道だったでしょ。」と答えるO君。

（1年男）

子どもにとって、近道とはイメージの道であり、決して物理的な距離の短さをあらわす道ではない。確かに路地の道はトトロの小路のように楽しげであった。

時間

表にも明記してあるように、(1)イメージの連続性・(2)反復・(3)蘇生・(4)流動性・流浪性については、人間が本性として持っているイメージの発動性といえるのではないか。つまりのっている状態といえる。これがそれぞれの個々の人々のイメージの偏向性にもなり、偏向性故に、個性にもなりうるのではないか。

(5)だまる・(6)待つについては、人間の本性の動きに対する対処法と考えられるのではないか。つまり場面に対する適応性の問題になると考えられる。全くのっていない状態であるということである。

(1)イマジネーションの連続性

（次から次へ）

イメージというのは、一枚の固定化した絵ではない。絵巻物であると考えた方が良い。子どもがはしゃぎまわっているのも、イメージ力がそうさせていると考えるのが妥当だろう。だから、とぎれることなく、次から次へと動きまわるのである。子どものイメージの流れそのものを、イマジネーションの連続性と、本会では名付けている。

子どものあらゆる場面に連続性は関与してくるが、顕著なものとしては、文を書く場合である。「穴」という題で文を書かせたところ、次々に続き、とどまるところを知らない。

一例を挙げてみると

○ ほら穴の宝

わたしは、きょう川へつりに行った。わたしはこいを三匹、ふなを二匹、子がめを四匹、めだかを五匹もつった。あわせて十四ひきだ。わたしはちょうど、バケツを二こもってきた。一こは大きいの一こは中ぐらいのだ。大きいのに水をいっぱい入れた……土がもりあがっているところがあった。そうしたら、なんとほら穴があった。そしたら、たんけんしたくなった。……以下原稿用紙に延々と続く

（1年女子）

(2)イマジネーションの反復

イマジネーションが反復することによって、興奮がおきてくる。子どもたちの遊びはこの興奮がたまらないのである。

○坊主めくりをする。なかなか手を出さないK子ちゃん、

K「あーだめだよ。どきどきしちゃってとれないよ。だめだ。K子見ている方がいい。」

M「わたしも、ここんとこドキドキしちゃって、死にそうになっちゃう。」（1年女）

○みんなでトランプ遊びをやる。同じカードがきたら相手の名前を呼ぶゲームである。

C「ふーちゃん、ずるいよ。人のこと指さして、指さされると、ちよの声、ひっこんじゃうよ。」

F「じゃあ、ちよも指させばいいだろう。」

C「もう、まったく、こうやるから、ちよ、声が出ないよ。」

（2年女・4年男）

○寿限無の話をする。

〈玉のような男の子がうまれました〉

「玉、玉、玉……」

と狂うように言い止まらなくなる。奇声を発して、もだえ笑いをする。

（3年男）

イメージの切り換えが出来ずに、初歩的なくり返しを続け、自分の感情を強調するのは子どもによく見られることである。

(3)イマジネーションの蘇生

このイメージの蘇生に関しては、イメージの残像性の問題を考えないわけにはいかない。残像性のことも含めていると考えてもらうと良いと思う。それはどうしてかというと、幼児期に於けるイメージの残像の蓄積を考えて残ったイメージが、その子の体感にどのように影響を与えているかも、ふまえていなければならないからである。その上でのイメージの蘇生であるべきであるからである。

しかし、この問題は、まだ未調査である。「あのときから私は変わった」というような文を書かせ、自分の体感

調査を行うのも、一つの手段のように考える。残像性の調査をふまえてはいないが、イメージの蘇生と考えられる例をあげていきたいと思う。

○車に酔うと思っただけで酔ってしまう。

○おなかが痛くなるんじゃないかと思うだけで、気をかける分、痛くなってしまう。

○くるくるまわりをしてからのオニごっこにどうしても入ることができない子がいた。もう想像しただけで、気分が悪くなるのだそうである。（4年女）

○運動会の終了した三日後、学校で運動会の絵を書かせた。ひとりの男の子は書きはじめから書き終わるまで運動会の歌をうたいっ放しだった。そして書き終わったとき、「あー、くたびれた。」と持ってきた。

〈そうね。歌、歌い通しでくたびれたよね。〉

「ぼく、うたなんかうたっていないよ。絵をかいていたんだよ。」うたと伴に映像が再現されたのだろう。（1年男）

○給食の時、ビビデバビデブーの曲がかかると大さわぎ、狂っておどる。それは、一年生のとき、その曲でやっぱりはしゃぎ出し踊り狂っていたそうである。どういうわけかその曲がかかるとおどり狂う。（3年男女）

(4)イマジネーションの流動性・流浪性（偏向性）

(3)のところでイマジネーションの蘇生を扱い、その時、イメージの残像性の問題にふれた。その残像の仕方が、その人のイメージが流れるひとつの方向性になるのではないかということも述べた。ここで考えられるイメージの特徴はイメージはどんどん流れていき、そして、それはひとつの偏向性をもつということである。人それぞれのイメージのくせと言ってもいいのではないか。

○研究会員の中に詩を書くSさんがいる。Sさんは、小学校時代大変困ったことがあったと言っている。それは、音読の時間に文章にないものを読んで先生に注意される。しかし何度注意されても文章が忠実に読めない。イメージが流れはじめてしまい、自分の言葉がなめらかに口をついて出てしまうのだそうだ。

○雪のお話を読んでいて、ちょうどその時、雪がふってきた。

「先生、知っていたの？」

と真顔で子どもが叫ぶ。（5才男）

○上原先生が目をつぶって寝ていると、お孫さんが二人来て

「じいちゃん、だいじょうぶ。」

「じいちゃん、死ぬんか。」

といい、二人で花をつんでまくらもとにたむけて、おがんでくれた。（5才女、4才男）

時間のはじめのところでも述べたが、今までは、イメージの発動性を中心に考え、(5)(6)は、イメージの適応性の問題になる。

(5)だまる

（イマジネーションの清浄性）

○ぼーとしている子がいる。どうしたのかと問うと、

「ぼくは、ときどき停止するんです。」（4年男）

イメージ活動を休ませることにより清浄化をはかっているのだろう。

○さわいでいる子がいる。

〈○○君、だまりなさい。すこししゃべるのをやめて〉

C1「ぼく、しゃべっていないもの。だれが、しゃべっているって言うの？ぼくが、いつしゃべってんだよ……（続く）……。」

C2「○○、おまえ、しゃべっているよ。」（3年男）

自分がしゃべっていることに気付かない。清浄性が全くもてていない。イメージの切り換えの出来ない子はだまることができない。

○（だまって、学校内を歩いたあとに書いた詩）

だまる
心の中で
「一、二の三、むっ」
と、気合いをいれた
しーんと、しずまりかえる
きもちがわるい
歩きながら、ろうかのかべに
ほおをつける
ふしぎだ
いつもより、つめたい
いつもより、気持ちいい
だまっていると、みんなつめたい
ろうかのかべも
うわばきも
かいだんも
みんなつめたい
だまっていると、心の中が
今、
そうじされているようだ
（3年男）

(6)待つ

待つもだまるも、自分の時間に対する適応性の問題だと考える。

○研究会員Hさんと待ち合わせをしていたが、時間におくれそうになったので、お宅に電話をすると、「あの子は待つことにかけては、大丈夫ですから。」とのお母さんの言。待てない私は、びっくりしてしまい、Hさんらしいと思った。

Hさんは、待つ間、自分のイメージで遊ぶことができる。

○バス停でバスがなかなかこない。そこに通りかかった男の子

「バスこないんか、がんばれよ。」

（がんばらないと待てないのが子どもである。）（4年男）

時間・空間の転換（トランスフォーメーション）

「時間・空間を窮屈に縛りあげないで、時空の放埒現象を垣間見ようとするかつての日本人が抱いていた特有といってもよいトランスフォーメーションを考えるようになってからである。」と上原輝男氏は「かぶき十話」の中で、自分の考え方や思い方の基本を述べている。トランスフォーメーションを考えるようになってから、自分自身の感覚や感情を、解放することが出来るようになってきたということを言っているのだと思う。もっと平たく言うと、「はっとすることですよ。」とおっしゃっていた。「はっとするということは、その時、時間・空間が、変わっているということなのです。」と。時間・空間の転換をすることにより、人間は自分のイメージをさらに伸ばすことが出来うるということだと思う。

そうして、そのトランスフォーメーションを起こすには、これからあげる(1)変身(2)存在(3)人形(4)見立て(5)白昼夢(6)つぼなどが、その大きなキーワードになるのではないかと考える。勿論、今まで述べてきた時間・空間の項目とも、重複する部分はあるが、表の前でも述べた通り、あえて、間をわけるとすると、こうなると考えてもらいたい。

(1)変身

仮装性・変身願望があってするものではないことをことわっておきたい。単なるイメージチェンジではない。もしもの世界を意識的に動かすことである。

○30のことばの中から、3つの言葉を選び出し、即興で話を作る授業を行った。（本誌研究授業に掲載）そのとき「鏡・馬・波」のことばを選んだ時にはなしてくれたイメージ。

（目をつむりながら）あのね、かわいがっていた馬が、犬じゃなくてね。馬が死んじゃったんですよ。かわいがっていた馬が、いなくなって、さみしいなと思っていたんだけれど。馬はどうしているかな…と思ったら、思って…もしかして鏡の中の向こうの世界が馬がいる世界だといいな。と思って、でそういうふうに思ってみるとみえるんです。みると馬が波のところで、ほら波と砂があるでしょ、あそこで楽しそうに走ってる（6年女）

鏡を考える時、鏡の中と設定するすばらしいさ。これをもしもの世界と考え、この世界転換として変身を、この項の変身と考える。

(2)存在

Ⓐむかしむかしの世界（空間的な把握）

○「むかしむかし私はまだ生まれてませんでした。だから、むかしのことは知りません。」（1年女）

○夜ねるとき話をしてあげるのだが、かならず、

「ねぇ、むかしむかしをつけてからお話して」と言う。（5才男）

Ⓑ歴史（時間的な把握）

○「尾久島の杉」という題名の詩を読んだあと、

「すげぇー。」と一言（4年男）

○二年生が自分のもとのクラスの部屋に来る。

「なつかしいな　ずいぶんむかしの思い出みたい。」（2年女）

○「ねぇ、どうしてこの写真の中にぼくはいないの？」

〈まだ、生まれていなかったのよ〉

「どうして。トモちゃんだけいて、ぼくがいないってそんなのズルイよ。」（1年男）

○「ねぇ、このねこ何才？」

〈えーとこのねこがお産したとき、あなたが生まれたから、やっちゃんより一つ上ね〉

「えー、ぼくより前にうまれてたなんて冗談じゃないよ。」とねこをけとばす。（3年男）

○羽黒山の五重の塔の杉木立の中に立ってみるとふっと自分が時間を逆のぼっているように感じる。この杉木立と五重の塔がもう何百年も前からここにあったんだと思うと時間をとても感じる。（K会員）

○ぼくの家から駅に出る時、大きな楠がある。その下を通るたびに、くやしくなる（上原先生）

(3)人形（呪術性をもってして"あの世とこの世"を結びつけるイマジネーション）

こわい・たたり・人間・血・心。これらの意識と位置は呪術的要素を多く含むと考えられる。四つの仮説（1祈祷性2没我性3邂逅性4予見性）は、人形だけに含まれるのではなく、全体に底流として流れているものであるが、人形に顕著に含まれているということに於いて、表のここに位置させた。人形についてはこのテーマの大きさを考え、別に本研究会で資料をとり、細かく考察を行っているのでここでは、一、二の例をあげるだけで小林氏の論文にかえさせていただく。

呪術性の代表として二つのスナップをあげる。

○てるてる坊主を作る。

「たのむぞ。」と言ってくっつけるが、いつのまにか逆さになっている。そして雨。

「お母さん、てるてる坊主のつけ方悪いから、雨だよ。逆立ちしてちゃ、てるてる坊主も、おこっちゃうよ」（3年男）

○「ついている日とついていない日があるんだ。」

〈何が？〉

「そりゃ、神様だよ」（3年男）

(4)見立て

郡司正勝氏は「風流」の中で「見立ての始源は『古事記』のイザナギが島

に天降りし坐して、『天の御柱を見立て八尋殿を見立てたまいき』というのを、折口信夫が、ありもしない御殿をまず見立てたのだというのは正しい。見立ては呪力なのである。ムラゲは棟の高さを二丈八尺ととるのは、二と八で『天』を見立てたのであるとするのも、この呪力に頼みをかけたのである。『遊び』の真実もここにあろう」と書いている。見立ては呪力であり、遊びの真髄であると考えて良いと思う。子どもたちは、この見立てで、イメージの転換をし、時空を遊んでいるように思う。

○一年生を受け持って十日目。家庭訪問があるので家までの道を知りたくて、思いえがいてもらうために一緒に家までの道を頭の中に再現してもらった。

C1「先生まだランドセルしょえていない」

C2「先生、いそいだらころんじゃった」

C3「犬においかけられたよ。」

その間とてもうるさいが、家に一応かえりつくと

C4「あーくたびれた。でもたのしかった。」（1年男女）

○我クラスでは、動いてうるさくてしかたのない子を入院させている。入院といっても、私の机のとなりの席に来るだけだが、みんな真剣。入院規則も作った。あまり規則に違反すると、隣りの大学病院に転院もする。これらのやくそくは、どんどん子ども達が作る。

S「Yちゃんも先生入院したいみたいよ。」と女の子が言いに来る。入院していた子

H「だめだよ。今、満員だよ。」と、居心地も悪くなさそう。

（3年男女）

○「ディズニーランドに連れていって」という子に、「じゃー今からいくよ。さぁキップ買った。どこへ行こうか……。」と案内する。子どもはそれで満足（1年女）

○何もないが子どもたちにゲームに勝つと表彰状をわたす。わたすふりをするだけなのだが、子どもたちは、その気になりうやうやしくおしいただく。（1年男女）

○すもうが始まると我が家の息子は、テラッタテラッタテラッタという声とともに私の腰にかかってくる。「おかあさんも、だまっていないで、テラッタ、テラッタっていって。」このテラッタで、土俵が再現されるのだろう。（テラッタは行司ののこったの声である）（4年男）

この他に、ままごとの役割分担。（犬まで登場してくる）ごっこ遊びは、みなこの見立てに入るのではないだろうか。ほんのちょっとの見立てで子どもたちは、ふわぁと浮きたのし気である。

(5)白昼夢

うそと言ってしまうにはあまりにも鮮明なイメージの広がりを感じ、やはりそこには、子どもの夢と現実の中をさまよっている感覚があるのではないか。

○「私のおじいちゃん市長さんとしょっちゅう話しているんだよ。」から始まり、

「私のおじいちゃん、皇居に行くんだよ。だって、皇太子さんの結婚式に招待されてるんだ。だから大変なんだって。」（4年女）

○航空機事故が夏にあった年の九月、夏休みの思い出を話させると、

「ぼくはあの事故現場にいたんです。でも、子どもだと思ってばかにして、ぼくの言うことをみんな信用してくれないんです。」

「へーそりゃぁ、大変だったね。」と、他の子は感心してきている。でも本当は、その近くにも行っておらず本人は自宅にいた。（2年男）

(6)つぼ

骨格に位置するものではあるがこの項では内容を省く。本誌の葛西氏の「トランスフォーメーションの獲得」の論文を参照されたし。

最後に古典的な言い方としてのイマジネーションの言葉も付け加えておきたい。

かかり

うつり

のり

である。かかりはイメージの発動の発動、初手である。病に置きかえると、インフルエンザに、かかったのである。

うつりは、その発動状態の説明。病で言うと潜伏感染状態である。そしてのりがくる。

のりは、そのイメージ運動の促進が進行している状態である。病が、どれ位すすんでいるかが、のりぐあいでわかるということである。出来上がった構造図には含めなかったがイマジネーションの動きを大まかに定量していることばだと考え、つけ加えた。

注1構造図の中の空間で(3)あの世とこの世の項目を入れてあり、さらに人形のサブタイトルにも〝あの世とこの世〟というタイトルをつけているが、あの世とこの世の問題は、イマジネーションを考える上で根源的な問題であり、全体を通じて考えられる大きな問題である。冒頭でもことわっておいたが、あくまで間（ま）の問題を考える上での便宜上のわけ方であるので、重複する個所の多いところがあることをことわっておきたい。

注2構造図の中では、イメージ活動であることを、強調するために、イマジネーションということばを使ったが、解説のところではイメージということばで表現している。同意と考えていただいて良い。

（町田第四小・教諭）